

創世ホール通信 No. 295

催し案内 + 文化ジャーナル
2019年8月1日発行 ■北島町立図書館・創世ホール
電話：088-698-1100 ファクシミリ：088-698-1180
〒771-0207 徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91



あかちゃんとお母さんのための ビデオ上映会

8月8日(木)

午前11時～(開場10時30分)

会場：2階 ハイビジョンシアター

上映作品：「ミッフィーとどうぶつえん」

上映時間約35分

主催：北島町教育委員会(☎088-698-9812)

江富久雄子ども写真展

8月23日(金)～25日(日)

会場：2階 ギャラリースペース 入場無料

主催：江富写真館(☎088-698-6888)

♪シンフォニア徳島♪ そよかぜコンサート

9月15日(日)

午後2時30分～(開場：午後2時)

会場：3階 多目的ホール 入場無料

演奏曲：「となりのトトロ」(『となりのトトロ』より)、

「君をのせて」(『天空の城ラピュタ』より)

歌劇「ペールギュント」第一組曲より「朝」

(グリーグ)、ほか

演奏時間約80分

主催：シンフォニア徳島(☎050-5438-5118)

後援：北島町教育委員会(☎088-698-9812)

徳島県内の音楽家で結成されたアマチュアオーケストラによる演奏会です。指揮を体験できるコーナーなど、子どもから大人まで楽しめるプログラムになっています。

北島トラディショナル・ナイト23 アイリッシュの森 ～ガールズ・バンドきゃめるコンサート～

10月31日(木)

午後7時～午後9時

会場：3階 多目的ホール

出演者：きゃめる

高梨 菖子 ホイッスル

酒井 絵美 フィドル

岡 皆実 ブズーキ

成田有佳里 バウロン・コンサーティーナ

入場料：一般 前売2,000円 当日2,500円

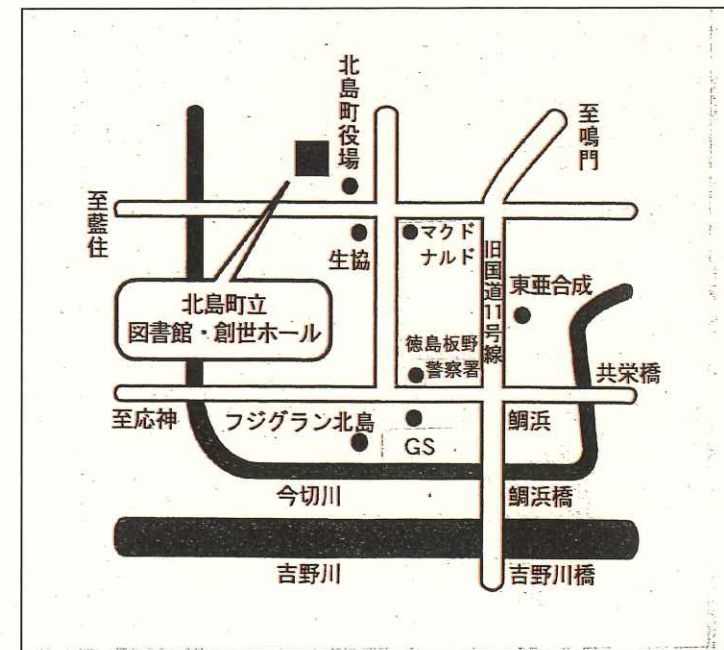
小中高生 前売1,500円 当日2,000円

トラディショナル・ナイト
初登場!
です。

■毎年ご好評いただいております北島トラディショナル・ナイト、今年は国内アイリッシュ・ガールズ・バンドの先駆者であり、結成10周年を迎える《きゃめる》の演奏会を行います！芸術の秋の夕べは、遙かなるケルトの調べに耳を傾けてみませんか？■演奏曲などの詳細は次号以降にお伝えします。ご期待ください。



《きゃめる：左から 酒井絵美(フィドル)・成田有佳里(バウロン)・高梨菖子(ホイッスル)・岡皆実(ブズーキ)(敬称略)》



文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

だれが明朝体を作ったのか

～その誕生と歴史②

書体設計家、活字書体史研究家★小宮山博史

講演 ■次、お願いします。これは『オラティオ・ドミニカ』の印刷博物館所蔵本です。非常にきれいなものです。これは1806年ぐらいのもの。なんでこういう風になっているか、よく分かりませんが、年を越して印刷しているようです。これも40ポイントのものです。

■はい、今まではポドニのものでしたけど、ここからはローマの布教聖書。プロバガンダ・フィデと言って、布教活動に全責任を持つローマ・カトリックの本山の官庁。

■見てお分かりのとおり、非常に出来の悪いものです。これは1870年の見本帳なんですけど、初版が実は18世紀の後半に出ているので、これは第2版ですね。実際には第1版にこれと同じものがあつたと考えられます。

■本当に出来の悪いもので、フランスの王立印刷所の見本帳と比べても遜色のない出来の悪さということになります。

■この中に「見」という字が出てきます。2行目の上から3つ目。その右上にマル(○)がくっついている。外国の見本帳—漢字の見本帳—には、よくこういう記号が付いているものがある。実はこれは漢字としては「見」だけど、右上にマルが付くと発音が変わって、「現れる」ということで意味が変わってくる。中国人の場合には、前後の文章からこれが「見る」の意味なのか、「現れる」の意味なのかは分かるわけなんですけど、外国人の場合、こういう記号を付けてやらないと、これがどういう意味の漢字なのかよく分からない、ということがあります。

■これも同じ布教聖省の見本帳。少し小さく縦長ですので、さっきの大きいものの下に2行の割注—注釈文—を置くための字のようです。これにも「見」にマル(○)が付いている。外国の見本帳を見ると、色んな漢字に対して○が付いているのがたくさんあります。それで意味の変更を伝えていたようです。

■ここまで1800年代の前半だったんですが、実はこういう漢字活字が生まれてくるには、特に明朝体に関してですが、中国が世界を変えた4大発明というのがありますが、まず紙ですね。これは紀元前です。それから活字、方向磁石、それと火薬。

■特にこの方向磁石は明朝体活字の開発にも物凄く大きな影響を与えている。方向磁石というのは、大航海時代以前は沿岸航路しかできなかったものが、磁石によって、遠洋航海ができるようになった。アメリカ大陸の発見がそうだし、インドに行くのもそうだし、それから中国に行くのもそうだった。特に中国に行った船からは中国の珍しい文物が持ち帰られてきた。そうするとそれに対する興味というものが当然湧いてくる。東洋学の誕生になります。

■その国と貿易をしたいと考える人も現れる。そうするとどうしても中国語と自分の国の言語の対訳の辞書が必要になってくる。辞書

が必要になってきたときに、じゃあこの漢字活字をどういうスタイルで作るのかというのが当然問題になると思いますが、中国人の場合には、明朝体なんて大嫌いですから—今でも大嫌いで、こんなもの字じゃないと思っていますから—、まず楷書だと思んですが、ただ楷書を外国人が書くのは難しい。かなりの訓練がないとかけない。それに対して明朝体というのは、水平垂直が基本で、ある一定のスタイルを覚えてしまえばだれにでも作れる。そういう非常にポピュラーなスタイルであるということ。

■それからヨーロッパの人たちが使っているローマン体というのは縦線が太く、横線が細い書体なんですね。それと対応するものであれば、この明朝体という形になるであろうというのが、普通ではないかなという風に考える。

■今、貿易とか東洋学の関係から、これ(明朝体)ができたと申し上げた。この後、ちょっと話がかわるんですけど、少し面白いお話を……。学校の教科書に出てくるロゼッタ・ストーン。1799年ですかね、ナポレオンが軍隊を率いてエジプト遠征に入ります。その時に前方では鉄砲を撃っているんですけど、後ろでは学者が何百人もいて、遺跡を掘っている。非常に不思議な軍隊。その時にフランス軍の士官の一人がロゼッタという町でこれを見つけた。1メートルぐらいの大きさです。ここには3つの言語が彫られている。一番上がエジプトの神聖文字(ヒエログリフ)。次がエジプトの民衆文字。そして一番下にギリシャ文字。

■で、この中でも一番上の神聖文字は誰も読むことができなかった。これを解読したのは、シャンポリオンという言語学者。多分1824年だったんですが、実はシャンポリオンは神聖文字の楕円で囲んだところ、それをギリシャ語と対照して王様の名前であろうと推測するわけです。それが、このヒエログリフの解読につながっていきます。

■はい、次。これはローマの布教聖書の見本帳の中にあるヒエログリフです。これを覚えておいてください。実はヒエログリフの活字を作ったのはフランス人でして、図版の一番上の左側部分に二つの文字を並べてあります。左側がプトレマイオス、右側がクレオパトラ。この二つのものがロゼッタ・ストーンに入っていた。ここから解読していくんですね。

■で、それをフランス王立印刷所の種字彫刻師ドラフォンと息子のラメが、10年くらいかかって活字を作るんですけど、フランスの場合だったらこれを使って調査報告書を作るための活字であったといえると思うんですよ。だけど、一つ画像を戻してください、これはローマの布教聖書ですから、キリスト教の布教に関するセクションです。

■だけど考えてみると、この時代ヒエログリフを読める異教徒はいないんですよ。何のためにこれをやったのか良く分からないんですけど、もしかしたら今はもういないエジプトのファラオにさえ布教するんだという、凄いことを言っているのかもしれない。良く分かりませんが、考えてみると不思議なところに不思議なものがある。

■シャンポリオンが解読したのが1824年ぐらいですから、布教聖書のこれが出たにしても1850年ぐらいだと思んですけど、そのころにヒエログリフを読める人は(世界に)10人もいないんじゃないかと思う。非常に不思議な編集方針です。

■活字の作り方ということで、少しお話をさせていただくと、古い

時代は原寸で彫ります。逆字でね。これはヨーロッパの場合には、金属に彫った。逆字で金属に彫った。

■だから16ミリの活字であれば、16ミリの金属に凸刻(とつこく)。凸型で、鉄—と言っても少し柔らかい鉄ではないかと思うのですが—、それを彫り上げたら、そこに少し熱を加えて硬度を高めて、それを母型材である金属に打ち込んでいって、凹型を作る。そこへ金属を流し込んで作る。この活字の作り方というのを、ちょっと覚えておいていただけたらいいかなと思います。

■はい、次の図版……。これが僕が見てきた中では最も豪華な活字見本帳です。表紙の正面に「N」のマークが入っています。大きさはA3判。だからこれぐらいですね(A3サイズの紙を掲げてみせる)。表紙についているNというのはナポレオン三世が持っていた本と言われてます。この本には96番目のコピーという風に印刷されていますが、いったい何冊印刷されたのか、よく分からない。

■フランスの文化程度の高さというのは、実はこの見本帳を見るだけで分かるんですけど、この見本帳には文字の見本とそれから飾り罫の見本と、色んなものが入っているんですけど、後ろの数ページにわたって、それを彫った人の名前、それから材質、年代が全部記録されています。

■日本の活字見本では—現在のデジタル・フォントはだいぶ変わりましたが—、彫った人の名前は一切出てこない。そういうところから比べるとやはり文化に対する姿勢、特に活字文化・文字文化に対する態度はだいぶ違います。

■残念ながら日本はそれをだれが作ったのかということについては、やっと今のデジタルになって、表に出てきたぐらいです。フランスでは1845年ぐらいにそういう記録がされていて、よく分かるようになっています。

■ただ、これは当然、フランスの国立印刷局には1冊残っていて、あとは丸善の本の図書館というところで調べてもらったところでは、アメリカに1冊あると言われてるけど、あとはどうもよく分からない。ただ、ナンバーが96番目ですから、当然それ以上は出ていないはずなんですけど、それ以上はよく分からない。丸善で調べてもらったときに、1845年の商業印刷物のリスト、出版目録にはこの本は入ってない。ということは、この本は非公式文書であったんじゃないかと丸善の本の図書館は言っている。フランスの国立印刷局に尋ねたことがあるんですけど、記録は一切ないということです。

■今、ここでご覧いただいている書籍の殆どは、横浜の横浜市歴史博物館が所蔵しています。ですからまだ一般公開はされていませんけれども、もし興味があつて横浜へ来られたら、横浜市歴史博物館や横浜開港資料館—大棧橋の前にある元のイギリス領事館—なかなか良い所ですからぜひ行ってみてください。

■はい、次。ま、こうやって活字見本帳を集めるっていうのは、なかなか手間のかかることでして、僕がこういうものを買った頃は、それほど高い値段ではなかったんですけど、だんだん値上がりしてもう手が出なくなった。

■これはフランスの本なんですけど、ちょっと珍しい活字です。《分合活字》。《分合》というのは、分けて合わせるという意味です。「新」という字を拡大してください。変な形でしょ。左と右のバランスが悪い。大きさもバランスが悪いんですけど。(以下、次号に続く)